

つくりあげてきた東北の首都のシンボル

杜の都のケヤキを守る 仙台市

西村幸夫



戦災復興が緑をつくった稀有のまち

いまでは「杜の都」が仙台の代名詞であることに誰も疑問を持たない。そして「杜の都」のイメージを生み出しているのが都心のケヤキ並木であり、それが戦後生まれであることもよく知られている。「杜の都」は戦後の都市計画の努力によって形づくられたのである。

終戦の直後、戦災都市の指定を受けた115都市では戦災復興計画が立案された。しかし、その後国庫補助が先細りとなり、1959年に途絶えたこと、特に東京が復興事業に積極的でなかったことなどから、都市計画の分野での関心はあまり高くなかった。その中でも熱心な戦災復興事業の結実を今日の都市景観から読み取れる都市も少なくない。前橋、名古屋、広島、鹿児島と並んで、仙台は事業推進の先頭グループであって、定禅寺通や青葉通の鬱蒼たるケヤキ並木の景観はその街路計画によって生まれたのである。戦災復興の街路計画というと、ともすれば無味乾燥な広幅員道路を思い浮かべがちだが、植樹帯を十分に確保した道路は、並木が育つにつれ見事な杜を形成することを仙台は明快に実証している。また仙台市には立派な戦災復興記念館があり、これも日本では珍しい。

1989年には地下駐輪場・地下道建設のため9本を伐採、その後3本を植えるという計画に反対運動が起こり、4本撤去のうち3本は植樹へと変更されたし、市営地下鉄南北線の建設・JR仙石線地下化の際にも撤去が行われ、後日若木によって景観が復旧されるなどがあったが、今回の規模はこれまでに大きく、ここに至ってケヤキ保存運動に火がついた。

模索される官民協調の方策

仙台市は2003年に1万人規模の市民アンケートを実施したあと、ケヤキ保存のため最大限配慮する方針を打ち出した。工事によって影響を受ける木を50本に減らし、すべて移植へと方針転換し、2007年度予算案に移植経費約1億6千万円を計上した。ところが市議会は、伐採の約5倍の経費がかかる移植は税金の無駄遣いとして否決したのである。市は工法を変更、撤去を44本まで減らし、うち7本の移植費用を計上するというさらなる方針変更を行い、残り37本分の移植費用は断念した。しかし同時に、市は伐採予定のケヤキについても移植の申し出には可能な限り応じるとしたのである。この段階から、伐採して新規植栽か、移植か、という二者択一ではなく、移植にどれだけ民間の力が生かせるかという官民協調の新しい方策も視野に入れることになった。その結果、10月には2団体から11本のケヤキを大学キャンパスや公園など公的なスペースへ移植という申し出があり、譲渡が決定した。これで合計18本のケヤキが伐採を免れることになったのである。財政難のなかでの戦災復興象

幅員46mで計画された定禅寺通は中央に6mの歩行者路、これを挟み込む両側の幅3mの植樹帯、その外側の幅員10mの車道、さらにその外側に幅員7mの歩道という見事な都市デザインで、計画通りに実現している。建設当初の写真では細々としたケヤキが、不自然に広い植樹帯の中に間隔をおいて配されているだけである。この風景を目前にし、30年後、50年後の杜の姿を思い浮かべた当時の土木技術スタッフの、豊かなイマジネーションとスケールの大きな構想力に対し、私はひとりの都市プランナーとして驚きを隠せない。このケヤキはまた、街路の一点景であることを超えて、仙台市民のものへと育っていった。1971年に市民投票で市の木に選ばれ、73年には「杜の都の環境をつくる条例」が制定され、75年には同条例によって青葉通と定禅寺通のケヤキ並木は保存樹林に指定された。

危機に瀕したケヤキ並木

そのケヤキ並木に危機が訪れた。2002年、仙台市は市営地下鉄東西線の駅建設のために青葉通のケヤキ223本のうち77本の撤去と工事後の新たなケヤキの移植を発表した。ケヤキ並木が伐採の危機に瀕するのは今回が初めてではない。

徴のケヤキ保存という難しい問題に、官民による第三の道への工夫を仙台市と市民はいまも続けている。この熱意こそが杜の都を将来につなぐ原動力なのだろう。

東北の首都 仙台の都心と今

雄藩仙台藩の伝統を受け、いまは東北六県の中核を担う仙台市は、周辺自治体関係機関、大学とも連携して、政令指定都市としての都市整備を着々と進めている。北部副都心の泉中央地区の複合地域開発をはじめ、地下鉄南北線の建設、JR仙石線の地下化、仙台空港アクセス鉄道の建設など意欲的な都市交通ネットワークの形成、さらに南部副都心として広大な国鉄跡地を活用する「あすと長町」事業も推進し、南北と中央にそれぞれ都市機能が集積するバランスのとれた都市づくりを目指している。渦中の地下鉄東西線は、産学連携のもとに先端産業の育成をはかる多くの大学と広域都市機能との交流軸という、学都仙台らしい役割を果たすはずで、やがてこの青葉通に新しい地下鉄が通り、再びケヤキの若葉がそよぐいきいきとした光景が見られることを期待したい。

西村 幸夫
にしむら ゆきお

東京大学工学部都市工学科卒業 同大学院修了
明治大学助手 アジア工科大学助教授
MIT客員研究員 コロンビア大学客員研究員
などを経て現職
専門は、都市計画、都市保全計画、市民のまちづくり論など
世界文化遺産の評価等を行う世界遺産記念物会 (ICOMOS) 前副会長 文化審議会専門委員
東京都景観審議会部会長「たかはし町並み建築デザイン賞」審査委員長など
著書「都市保全計画」町並みまちづくり物語」など多数



洗練されたパブリックデザインで評価の高い仙台市営地下鉄



戦後 街路のかたちが整えられた頃の定禅寺通



いまは「緑の河」となった定禅寺通



空を覆いつくすケヤキ並木と彫刻が美しい 定禅寺通



市民のパワーからはじまった SENDAI 光のページェント 定禅寺通



戦後いち早く無電柱化を実現した青葉通とケヤキ並木 官民協調で危機克服へ



南部の副都心として整備が進む「あすと長町」地区 (UR都市機構施行)



資料も豊富 全国的にも珍しい仙台市戦災復興記念館



美術と映像文化の拠点 せんだいメディアテーク 設計 伊東豊雄



四季鮮やか 都心に溢れる緑 仙台国際センター横



青葉城址から眺める仙台市の都心部 林立する高層ビルの中に瀬川が流れている